

小学校国語教科書に見る アンデルセン童話

北川公美子

A Study of H.C.Andersen's Fairy Tales
in Elementary School Textbooks

Kumiko KITAGAWA

1. はじめに

アンデルセン童話⁽¹⁾が日本にはじめて紹介されたのは、明治21(1888)年、雑誌『女学雑誌』の「皇帝の新衣裳」であった。その後、巖谷小波や鈴木三重吉など多くの翻訳者たちをによって他のアンデルセン童話も紹介され、今日の日本では、グリムとともに人気の高い、最も親しまれている童話の1つになっている。

アンデルセン童話が、母国デンマークで最初に出版されたのは1835年のことである。このときの原題は、“Eventyr fortale for B ϕ m”（子どもに話してきかせるお話）であり、“for B ϕ m”（子どものため）という言葉が使われている。しかしその後、自分の話し方が「どのような年齢の人にも親しまれることを知った」⁽²⁾ アンデルセンは、「童話というものが子供と大人の読物」⁽³⁾ になったと感じ、題名から“for B ϕ m”という言葉を用いなくなったのである。代わって、“Nye Eventyr”（新しいお話）や“Eventyr og Historier”（お話と物語）という表題が使われるようになった。つまり、子どもに話すように書かれたアンデルセン童話は、後には大人をも対象範囲と捉えて書かれたものなのである。山室静氏は、「むしろ、成人の方をより多く対象にしているとさえ言える」⁽⁴⁾ と述べている。しかし、日本においていえば、特に子どもに受け入れられているように思う。これはもちろん彼の童話が、それだけ子どもの心をとらえているからであるが、まわりの大人が「子どものための名作物語」として考えている結果でもあるのではないだろうか。大人たちは、アンデルセン童話を子どもにふさわしいものであると考え、子どもが無理なく親しむことができる形を考えた。子どもが理解しやすいように絵を用いた絵本や紙芝居、あるいは劇などがそれである。まず、子どもたちにアンデルセン童話を知ってほしい。そしてそれを楽しんでほしい。そのような想いで表現された様々な形を通じて、子どもたちは彼の童話と出会い、そして心をとらわれていくのである。つまり、アンデルセン童話がこれほど子どもたちに親しまれるということは、彼らが出会うための環境的配慮も要因の1つとして作用していると考えられるのである。

大学院 博士課程

このような、子どもたちとアンデルセン童話との出会いの場の1つに国語教科書がある。小学校の就学率がほぼ100%である日本において、教科書は子どもが必ず接するものであり、新たなアンデルセン童話との出会いの場になり得る可能性が高い。そのような国語教科書の中では、どのようなアンデルセン童話が取り入れられているのであろうか。本論文では、昭和22(1947)年から平成7(1995)年までの小学校国語教科書を対象とし、その中に取り上げられているアンデルセン童話の作品とその掲載状況、また、童話の1つを例にあげてその内容を比較検討していきたい。

2. 小学校国語教科書に掲載された童話の種類とその数

対象とする教科書は、昭和23年から平成7年のものについては『教科書検定総覧 小学校篇』及び『教科書検定総覧・続 小学校篇』から、昭和22年のものについては『日本教科書体系近代編 第9巻 国語(六)』と『東書文庫所蔵 教科用図書目録 第3集』の中からリストアップした。そして、そのリストをもとに、教科書研究センター、東書文庫、国立国語研究所及び東京家政大学児童文化研究室の資料の確認調査を行った。その結果が<表1>である。

これによると、昭和22年から平成7年までの国語教科書1382冊⁽⁵⁾のなかで、アンデルセン童話は<表2>に示した通り、10種の作品⁽⁶⁾が68回にわたり掲載されている。このうち、短い物語がおさめられた「絵のない絵本」は、本来童話として分類されていないため、掲載数は調査したが、本論文の比較検討対象からは除外する。よって、対象数は9作品56話である。この56話を学年別に分類したものが<表3>である。教科書は一度出版されるとある程度の期間継続して使用されるものだが、ここでリストアップした教科書の本数は、新たに出版されたもの、あるいは改訂されたもののみであり、継続期間中のものは数にいていない。ただし、年代別に分類した<表4><表5>については、その掲載継続状況を把握するために、同じ教科書を継続して使用している期間すべて調査し、その数を記した。<表5>の()内は、実際に使われているタイトルであり、教科書番号の詳しい書名は【資料1】のとおりである。これらアンデルセン童話の中には、読み物に限らず、紙芝居や放送劇(劇脚本)という形で掲載されているものもある。

<表2>をみると、出版社によって童話の種類は分散しているが、その中でも「皇帝の新しい着物」は出版社10社のうち7社、「さやからとび出た五つのエンドウ豆」は5社が取り上げている。以前、私は1985年までの、日本におけるアンデルセン童話絵本の出版状況の推移⁽⁷⁾を調査したが、調査対象数40作品400冊の中で、「皇帝の新しい着物」は第4位(32冊)であったのに対し、「さやからとび出た五つのエンドウ豆」は6冊しか出版されていなかった。アンデルセン童話の中でも知名度の低いこの童話が、教科書の掲載状況においては、絵本でも上位に入るほど知名度の高い「みにくいアヒルの子」や「マッチ売りの少女」と同じくらいの頻度で取り上げられていることは、注目すべきことである。もちろん絵本の対象者は主に幼児で

<表1> 国語教科書出版数

出版社名	出版数
日本書籍	195 (6)
東京書籍	178 (8)
大阪書籍	89 (7)
大日本図書	37 (0)
中教出版	39 (0)
学校図書	228 (14)
二葉	68 (2)
三省堂	15 (0)
教育出版	195 (13)
信濃教育会	60 (9)
光村図書	179 (6)
広島図書	13 (2)
日本書院	13 (1)
計	1310(68)

※ () 内はアンデルセン童話数

<表2> 出版社別アンデルセン童話掲載数

	日書	東書	大書	学図	二葉	教出	信濃	光村	広島	書院	計
親指姫								2			2
皇帝の新しい着物	3	2		7	2	6		2		1	23
野の白鳥			1						1		2
ナイチンゲール	1			3			5				9
みにくいアヒルの子		1	3	2					1		7
マッチ売りの少女		1					1				2
五つのエンドウ豆※	2	1	1	2		3					9
茶びん		1									1
ろうそく								1			1
絵のない絵本		2	2			4	3	1			12
計	6	8	7	14	2	13	9	6	2	1	68

注) 日書＝日本書籍 東書＝東京書籍 大書＝大阪書籍 学図＝学校図書 教出＝教育出版

信濃＝信濃教育会 光村＝光村図書 広島＝広島図書 書院＝日本書院

※五つのエンドウ豆＝さやからとび出た五つのエンドウ豆

＜表 3＞ 学年別アンデルセン童話掲載数

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	合計
親指姫		2					2
皇帝の新しい着物			4	19			23
野の白鳥		2					2
ナイチンゲール		3	5	1			9
みにくいアヒルの子				7			7
マッチ売りの少女				1		1	2
五つのエンドウ豆※			3	3	3		9
茶びん					1		1
ろうそく						1	1
計	0	7	12	31	4	2	56

※五つのエンドウ豆＝さやからとび出た五つのエンドウ豆

＜表 4＞ 年代別アンデルセン童話掲載数

	昭和 22～25	26～30	31～35	36～40	41～45	46～50	51～	計
親指姫			2	2				4
皇帝の新しい着物		9	28	13	16	18	3	87
野の白鳥		3	8	6	10	3		30
ナイチンゲール		3	1	3	2	1		10
みにくいアヒルの子	2	8						10
マッチ売りの少女	1	1	5					7
五つのエンドウ豆※		12	13	5	5			35
茶びん				1	2			3
ろうそく			2					2
計	3	36	59	30	35	22	3	188

※五つのエンドウ豆＝さやからとび出た五つのエンドウ豆

※横軸単位＝（昭和）年

※合計はのべ数

あり、小学生を対象とする国語教科書の状況と直接比較して結論をだすことは避けねばならない。しかし、このような現象の原因の1つとして、教科書に掲載される童話には、与える大人側から子どもたちへ意図された目的（目標）を含んでいることが関係しているのではないかとと思われるのである。絵本を読む子どもは、その物語に込められた作者の想いを無意識に感じとる。しかし、これは自分の心の中で自然に受け取るべきものであり、無理に感じとらせる必要はない。一方、国語教科書に取り上げられる物語には、「いろいろな物語を知ってほしい」という意図の他に、「そこから〇〇を感じとらせたい」という意図が込められているのである。これは、教訓性ということになるのかもしれない。そうすると、教科書に掲載される童話は、ある程度限定されてくる。教訓性を含むと同時に、子どもにとってもわかりやすい物語でなくてはならないのである。教科書に掲載された「さやからとび出た五つのエンドウ豆」の「てびき」や「目標」をみると、この童話は「人間の生きかたを示唆したものである」⁽⁸⁾「えんどうまめの少女に対するやさしい愛情を読みとらせ、美しいヒューマニズムに共感させ、文学的な情操を育てる」⁽⁹⁾と書かれている。人生の出発地点にいる小学生に対して、得てほしい教訓が教科書の中で明確に示されているのである。また、この童話ではエンドウ豆が擬人化して描かれており、それが子どもにとってはわかりやすい、親しみのある物語と考えられ、教科書に取り上げられたのではないだろうか

＜表3＞をみると、アンデルセン童話の中でも長編作品である「親指姫」を2年生で取り上げている。これは絵本などでよく知られ親しまれている作品であるため、長編ではあるが低学年の教科書に用いたのではないと思われる。また、アンデルセン童話の掲載数は4年生に多く、なかでも「皇帝の新しい着物」と「みにくいアヒルの子」は4年生に集中している。しかし、＜表5＞とあわせて見ると、「皇帝の新しい着物」が昭和27年から昭和51年まで継続的に掲載されているのに対し、「みにくいアヒルの子」は7冊とも昭和30年以後は掲載されない。昭和27年から30年までは両作品とも取り上げられているが、それ以後は、4年生を対象とする読み物が「みにくいアヒルの子」から「皇帝の新しい着物」へ移行していったようにみえるのである。童話の継続傾向は、この「皇帝の新しい着物」以外に、「ナイチンゲール」や「さやからとび出た五つのエンドウ豆」にもみられるが、その他の作品は短期間のみの掲載で終わっている。

また、＜表4＞からアンデルセン童話全体の傾向をみると、昭和35年頃をピークにして徐々に減少し、昭和51年以降はまったくみられなくなる。代わって、この頃から徐々に石井桃子氏、今江祥智氏など日本の作家の作品が取り上げられるようになっていく。これは1つの仮説であるが、アンデルセンなどの翻訳童話よりも日本の作家による創作童話の方が、日本の子どもたちを対象とする国語教科書にふさわしいと考えたのではないだろうか。

それでは、実際の内容にはどのような違いが見られるのであろうか。ここでは、「ナイチンゲール」を例に取り上げて内容の比較検討を行いたい。この童話は中国を舞台とし、アンデル

＜表5＞ アンデルセン童話掲載継続状況

※縦軸＝教科書ナンバー（資料1参照） 横軸単位＝（昭和）年

親指姫：（「おやゆびひめ」）

	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
1													○	○																
2															○	○														

皇帝の新しい着物：（「王様の着物」「はだかの王様」「はだかの王さま」「王さまの新しい服」）

	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
3						○	○	○	○	○																				
4						○	○	○	○	○	○	○	○	○																
5									○	○	○	○	○	○																
6										○	○	○	○	○																
7											○	○	○	○																
8												○	○	○	○															
9											○	○	○	○																
10															○	○	○	○												
11															○															
12																○	○	○	○	○	○									
13																	○	○	○	○	○									
14																		○	○	○	○									
15																		○	○	○	○									
16																		○	○	○										
17																						○	○	○						
18																							○	○	○					
19																								○	○	○				
20																									○	○	○			
21																										○	○	○		
22																											○	○	○	
23																												○	○	○
24																													○	○
25																														○

野の白鳥：（「白鳥ものがたり」）

	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
26								○	○																					
27							○																							

ナイチンゲール：（「夜うぐいす」「うぐいす」「森のうぐいす」）

	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
28								○	○	○	○	○																		
29									○	○	○	○																		
30													○	○																
31															○	○	○	○												
32																			○	○	○									
33																			○	○	○									
34																						○	○	○						
35																							○	○	○					
36																									○	○	○			

みにくいアヒルの子：（「みにくいあひるの子」「白鳥物語」）

	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
37	○																													
38				○	○																									
39						○																								
40						○																								
41						○	○																							
42								○	○																					
43								○																						

マッチ売りの少女：（「マッチ売りのむすめ」「マッチ売りの少女」）

	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
44	○																													
45								○	○	○	○	○	○	○																

さやからとび出た五つのエンドウ豆：（「五つぶのえんどうまめ」「五つぶのえんどう」「えんどうまめと少女」「エンドウと少女」）

	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
46						○																								
47						○																								
48							○	○	○	○	○	○	○	○																
49							○	○	○	○	○	○																		
50							○																							
51								○	○	○	○	○	○	○																
52															○	○	○	○												
53																			○	○	○									
54																						○	○	○						

茶びん：（「ポットの話」）

	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
55																			○	○	○									

ろうそく：（「二つのろうそく」）

	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
55												○	○																	

セン童話の中で日本についての記述がある唯一の作品である。

3. 童話内容の比較

対象となる教科書は【資料1】の28)～36)である。これらは比較しやすいように次のようなA・B・Cに改める。(以下、この表記を用いる)

	題名	出版社	掲載年	対象
A = 28	「夜うぐいす」	日本書籍	昭和29～33年	4年
B = 29	「うぐいす」	信濃教育会	昭和30～33年	3年
C = 30	「うぐいす」	信濃教育会	昭和34～35年	3年
D = 31	「うぐいす」	信濃教育会	昭和36～39年	3年
E = 33	「うぐいす」	信濃教育会	昭和40～42年	3年
F = 35	「うぐいす」	信濃教育会	昭和43～45年	3年
G = 32	「森のうぐいす」	学校図書	昭和40～42年	2年
H = 34	「森のうぐいす」	学校図書	昭和43～45年	2年
I = 36	「森のうぐいす」	学校図書	昭和46～48年	2年

この9話はそれぞれ出版社が異なるため、その翻訳者も異なると思われる。よって、9話全体をみて年代的な変化を比較することは難しい。そこでまず、原作⁽¹⁰⁾と比較することによって、これら9話の内容的な類似点・相違点を見だし、それについての検討を行いたい。そしてまた、国語教科書におけるこの童話の役割を、童話の終わりに載せられた「てびき」や「もんだい」から検討したいと思う。

1) 原作との内容比較

まず最初に題名をみると、「夜うぐいす」「うぐいす」「森のうぐいす」の3種類が使われている。原題は“Nattergalen”といい、これは英語の“Nightingal (ナイチンゲール)”にあたる。日本では鶯に似ていることからその名を用いているが、本物の“Nattergalen”は夜に鳴く。また原題の中の“Nat”は「夜」という意味をもつため、「夜うぐいす」という題名をつけたことはうなずける。原作でも次のような文章の中で、“Nattergalen”が夜に鳴くことをあらわしている。

「夜、網を引き上げに出かけて、ふと、ナイチンゲールの声を耳にしますとー(略)ー」⁽¹¹⁾

「ところが、次の晩、再び小鳥が歌をうたいー(略)ー」⁽¹¹⁾

しかし、実際にAの教科書の中では、特に「夜」という時間を意識させる記述はなされていないため、果たして読者側に「夜うぐいす」とした意味が伝わったかどうかは疑問である。ちなみにB～Fの教科書には、最後の場面で「その晩」という記述がある。「森のうぐいす」という題名については、ナイチンゲールが森に住んでいるという物語中の記述を考慮してつけら

れたものであろう。

もう1つ固有名詞についていえば、ナイチンゲールの次に主要な登場人物である“kejser”の訳である。これは“emperor”で「皇帝」の意味であるが、日本においては「皇帝」という言葉に馴染みがないためか、代わって「王様」という言葉がよく使われている。日本でよく知られてる「皇帝の新しい着物」も、原題では“kejser”という言葉を使っているが、日本では「王様」と訳されていることが多い。今回ここで取り上げたAからIまでの9話すべて、「王さま」という言葉を用いている⁽¹²⁾。

次に、内容を比較してみたい。以下の1)～32)は、内容の概略をあらわしている。

- 1) 舞台は中国
- 2) 御殿のすばらしさ（庭の広さ）
- 3) 庭のいちばんきれいな花に銀の鈴がついている
- 4) ナイチンゲールは森の中に住んでいる
- 5) ナイチンゲールの声のすばらしさ（漁師がききほれる）
- 6) 世界中の国々から旅人がやってくる
- 7) 旅人たちは、皆ナイチンゲールの声がいちばんだと言う
- 8) 学者がナイチンゲールのことを本に書く
- 9) 詩人がナイチンゲールのことを美しい詩にうたう
- 10) 日本の天子様がナイチンゲールについて書かれた本を送ってくる
- 11) 皇帝も家臣たちもナイチンゲールの存在を知らない
- 12) 家臣たちが探しまわったあぐく台所で働く貧しい小娘が知っていた
- 13) 小娘は、病気の母へ食事をもっていく途中の森の中でナイチンゲールの歌声をきいたことがあった
- 14) 小娘を台所の常雇いに取り立て、また、お上が食事をするところを拝ませる代わりにナイチンゲールのところまで案内させる
- 15) 家臣たちが牝牛やカエルをナイチンゲールとまちがえる
- 16) 家臣たちは枝に止まった小さな灰色の鳥ナイチンゲールを見つける
- 17) ナイチンゲールが皇帝の御殿に招かれて歌う
- 18) 褒美をわたそうとする皇帝に涙こそ宝といい辞退する
- 19) ナイチンゲールがそいのまま宮中にとどまり、12人の供とともに 昼に2回夜に1回、脚に絹のリボンをつけられて散歩する
- 20) 宝石を散りばめた作り物のナイチンゲールが、皇帝のもとへ届く
- 21) 作り物との二重唱をさせられたが拍子のあわず、また何度も歌われたため、ナイチンゲールは森へ帰ってしまう
- 22) ナイチンゲールは国を追われる

- 23) 作り物のナイチンゲールに称号が与えられ、本も書かれた
- 24) 作り物のナイチンゲールが壊れる
- 25) 皇帝が病気になる
- 26) 皇帝の前に、皇帝の金の冠・剣・旗を身につけて死神が現れた
- 27) 死神から逃れるために、皇帝は音楽を求めるが、壊れた作り物のナイチンゲールは動かない
- 28) 本物のナイチンゲールが現れて歌を歌う
- 29) 死神がナイチンゲールの声にききほれて、皇帝の冠などを返す
- 30) 再び自分の側にいてほしいという皇帝の頼みを断り、代わりに、好きなときに訪れて様々な人々のことを歌って聞かせると約束する
- 31) ナイチンゲールは、自分のことをだれにも言わないように皇帝にお願いする
- 32) 元気になった皇帝は、部屋に入ってきた家臣たちに「おはよう」とあいさつする

以上の概略を、それぞれの教科書と照らし合わせてみると、＜表6＞のようになる。同じ出版社の中では文章もほとんどかわらず、内容的な違いは出版社別にみられる。この表によると、どの教科書にも載せられた内容（表中の△印の内容も含む）は13点ある。しかし、同じ内容でも教科書によって細かな箇所の違いがある。そこで、その中のいくつかを取り上げて、その違いをみていきたい。

2) 御殿のすばらしさ（庭の広さ）

B～Iは、「庭は広く、花が咲いている」という説明しかなされてないが、Aだけは「庭の広いことは、おかかえの庭師でさえ、そのはてを知らないほどでした」と、より原作に近い具体的な説明がされている。これは、出版社の違いだけでなく、対象年齢がB～Iが2・3年生であるのに対し、Aが4年生であることと関係しているのではないだろうか。同様なことが22)にも見られる。作り物のナイチンゲールが歌った後、ナイチンゲールが御殿を逃げ出す状況が次のように表現されている。

A：「二つの鳥が合唱することになりました。けれども、それはうまくいきませんでした。なぜならほん物の夜うぐいすは自分の気の向くままに歌いますし、さいく物のほうは、きまった節をきまったように歌うからです。－（中略）－そこで、さいく物の鳥だけつづけて歌うことになりました。三十三回も、同じように歌わされましたが、いっこうにつかれません。－（中略）－こんどはほん物に歌わせようと、王さまは思いました。ですが、どこへ行ったのでしょうか。いつのまにかほん物の夜うぐいすは、いなくなっていました。」

B～F：「王さまもけらいたちも、このまぶしいほどりっばなおきもののうぐいすに、すっかり感心してしまって、心をこめて歌ってくれたあのやさしいうぐいすのことは、わすれていました。うぐいすは、そっとまどからとび出して、みどり

<表6> 童話「ナイチンゲール」の内容比較

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	○	○	○	○	○	○	×	×	×
2	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3	×	×	×	×	×	×	○	○	○
4	○	△	△	△	△	△	△	△	△
5	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7	○	△	△	△	△	△	△	△	△
8	○	×	×	×	×	×	△	△	△
9	○	○	○	○	○	○	×	×	×
10	○	×	×	×	×	×	×	×	×
11	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12	○	△	△	△	△	△	△	△	△
13	△	○	○	○	○	○	△	△	△
14	△	×	×	×	×	×	△	△	△
15	○	×	×	×	×	×	×	×	×
16	×	×	×	×	×	×	×	×	×
17	○	○	○	○	○	○	○	○	○
18	○	×	×	×	×	×	×	×	×
19	△	×	×	×	×	×	×	×	×
20	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21	△	△	△	△	△	△	△	△	△
22	○	×	×	×	×	×	×	×	×
23	×	×	×	×	×	×	×	×	×
24	○	×	×	×	×	×	○	○	○
25	○	○	○	○	○	○	○	○	○
26	△	×	×	×	×	×	×	×	×
27	○	×	×	×	×	×	×	×	×
28	○	○	○	○	○	○	○	○	○
29	×	×	×	×	×	×	×	×	×
30	×	×	×	×	×	×	△	△	△
31	×	×	×	×	×	×	×	×	×
32	○	×	×	×	×	×	○	○	○

※縦軸1)～32)＝内容の概略番号

※横軸＝教科書番号

※表中 ○印＝その内容がほとんど取り入れられている

△印＝表現が少し異なるが、内容はだいたい同じ

×

の森に帰りました。』

G～I：「金とほうせきでできたこの小鳥は、あつというまに、ごてんじゅうの人気をひとりじめにしてしまいました。それからというもの、もう、ごてんの人たちは、森のうぐいすのうたに、耳をかたむけようとしませんでした。森のうぐいすは、ある夜、そっと森へかえっていきました。』

対象となる子どもの読解力を考慮したものと思われ、4年生を対象としているAは他の教科書に比べてより原作に近い、細かな表現が記述されている。

6) 世界中の国々から旅人がやってくる

ここで表現されてる「旅人」は、原作では“rejsende”で英語の“traveller”の意味である。A・G・H・Iではそのまま「旅人」という言葉が使われているが、B～Eでは「いろいろな人」、Fでは「見物客」という言葉が使われている。「いろいろな人」という表現は「旅人」と比べると、訪れる人々の姿が漠然としてとらえにくい。他方、「見物客」という言葉は、「いろいろな人」と比べて限定された表現であり「旅人」と同じくらい明確な姿が浮かび上がるが、その言葉から受ける印象が「旅人」とは変わるように思われる。

12) 家臣たちが探しまわったあげく台所で働く貧しい小娘が知っていた

まず、小娘についての表現であるが、Aでは「台所で働いている貧しい娘」、B～Fでは「台所で水くみをしている小娘」、G～Iでは「ひとりの女の子」となっている。B～Fでは、彼女の働き場所がより具体的に示され、G～Iではそういった説明的文章が取り払われている。G～Iについては、2)と同様、出版社の違いによる相違点というだけでなく、2年生という対象に対する配慮であるとも考えられる。全体をとらえやすいように、物語の流れを変えない程度に削除された部分なのではないだろうか。また、「小娘」という言葉は、原作では“lille pige”（英語の“little girl”にあたる）であるが、Aのような「娘」という表現とは年齢のイメージが合わないように思う。挿し絵をみると、「小娘」という表現を使っているB～FもAも、少し大人びた10～15歳くらいの少女を描いている。一方、「女の子」という表現を用いているG～Iは、その言葉のイメージに近い幼い少女を描いている。ここにも出版社ごとの“lille pige”のとらえ方の違いがある。

28) 本物のナイチンゲールが現れて歌をうたう

病気の皇帝の前に現れて歌をうたうことは共通してみられる場面であるが、ナイチンゲールがなぜあらわれたかという理由が異なっている。Aでは、原作と同じように死神が登場し、皇帝から彼を追い払うためにナイチンゲールが歌う。しかしB～Fでは、「王さまの苦しみを知って、とんで来た」ことになっている。またG～Iでは、作り物のナイチンゲールが壊れたあと本物のナイチンゲールを懐かしんでいた皇帝が、病気の床で「森のうぐいすのうたをききたい。もういちど、あのうたを」と切望し、それにこたえる形で現れるのである。しかし、原作にはこのような記述はない。皇帝が死神を恐れて音楽を求めたが、

壊れた細工物のナイチンゲールはまったく動かない。そこへ本物のナイチンゲールがあらわれるのである。ナイチンゲールが皇帝の苦しみを知ったからということや、皇帝自身がナイチンゲールを求めたという記述はされていない。このような原作にない記述が加えられていることは、物語の最後に載せられた「てびき」や「もんだい」と関わっていると思われる。B～F、G～Iの「てびき」や「もんだい」では、「うぐいすは、どんな時に、王さまのごてんのまどべに来て鳴きましたか」「病気になったときの王さまの気持ちは？」などの質問がなされている。原作にない記述を加えた理由は、このような質問に対して子どもたちが答えやすいようにという配慮からではないかと思うのである。

30) 再び自分の側にいてほしいという皇帝の頼みを断り、代わりに、好きなときに訪れて様々な人々のことを歌って聞かせると約束する

32) 元気になった皇帝は、部屋に入ってきた家臣たちに「おはよう」とあいさつする

この2つの場面は、まとめて比較したほうがわかりやすいと思われるので、ここで一緒に述べることにする。ここには次のような違いが見られる。

A：死神を追いだした後、皇帝は褒美を与えようとするが、ナイチンゲールは断り、皇帝の眠っている間歌い続ける。夜があけて家臣たちがやってくると、皇帝は「おはよう」とあいさつをする。

B～F：突然やってきたナイチンゲールの歌声を聞きながら、皇帝はぐっすり眠る。あくる朝目覚めた皇帝は、ナイチンゲールにお礼を言おうとするが、すでにその姿はなかった。その晩、ナイチンゲールは水くみの娘のお母さんのために歌っていた。

G～I：もう一度あの歌声を聞きたいと切望していた皇帝の側で、夜通し歌い続けたナイチンゲールは、あくる朝、皇帝からの褒美を断った。そしてこれからも皇帝のために毎日歌うことを約束した。そして他の人々も楽しませたいので森でも歌わせてくれるように言っるとび去る。皇帝はあいさつにきた家臣たちに「おはよう」とあいさつする。

4年生を対象としたAがいちばん原作に近い。G～Iについては、皇帝のために「毎日」歌うとなっているが、原作では「好きなときに」となっている。また、「他の人々のためにも歌いたい」から森でも歌わせてほしいといっているが、原作では次のような表現になっている。

「わたくしは、仕合わせな人たちのことや、苦しみ悩んでいる人たちのことを歌いましょう。また、陛下のまわりにかくれている悪いこと、よいことについてもうたいましょう。この歌うたいの小鳥は、遠方の貧しい漁師のところへも、百姓家の屋根の上へも、また陛下や陛下の御殿から遠く離れたどんなところへも、飛んで行くのでございます。」

ナイチンゲールは、「誰か他の人のために歌いたい」というのではなく、「自分は様々な

人々を見ることができるから、そのことを皇帝に歌ってきかせる」と言っているのである。そうすると、G～Iの最後の箇所は似たような文章ではあるが、その意味は異なっていることがわかる。B～Fについては、原作とはまったく変えられ、物語の最初に登場した「水くみの娘」の母親に視点が戻ってしまっている。

以上、教科書ごとの内容の相違点をみてきたが、物語の大筋からは外れていないものの、ちょっとした言葉の使い方の違いによってニュアンスが変わり、それによって読者の抱くイメージも変えられているように思う。ところで、ここでもう1つ触れておきたいことは、10)の内容についてである。前に私は、「この童話は中国を舞台とし、アンデルセン童話の中で日本についての記述がある唯一の作品である」⁽¹³⁾と述べたが、その箇所にあたる10)の内容がA以外では削除されている。読者である子どもは、自分たちの国について触れられている物語に対して親近感をもつように思うのだが、B～Iの教科書を編集する際にはそのような意図は含まれていなかったようである。

2) 国語教科書の中における、童話「ナイチンゲール」の役割

では、国語教科書のなかでこの童話は、どのような学習の役割を担っているのであろうか。国語教科書においては、言葉の使い方や漢字の学習も役割の1つであるが、ここでは内容についてのみ述べたいと思う。各教科書の「てびき」や「もんだい」などをみると、次のようなことが取り上げられている。

A：（この童話は）どんなに巧妙にできていても、人工による細工物の夜うぐいすは、生きたほんものには及ばないということを物語っている。この学習によって童話、実話などを読む興味がますます高まり、文の筋や内容を確かに読むことができるようになる。

B：①王さまのごてんは、どんなごてんですか

②うぐいすは、どこにすんでいますか

③このうぐいすの声は、どんな声でしたか

④このうぐいすの声を知っていたのはだれですか

⑤うぐいすは、王さまのごてんへ、どんなにしてつれて来られましたか。また、ごてんからどうして飛び出して行きましたか

⑥うぐいすはまた、どういう時に、王さまのごてんのまどべに来て鳴きましたか

⑦それから、うぐいすはどうしましたか

C：①（B①と同じ）

②（B③と同じ）

③（B⑤と同じ）

④ (B⑥と同じ)

⑤それから、うぐいすはどうしましたか

王さまのごてんで、聞く人の心にしみとおるように鳴いて、人々をなぐさめるうぐいすの物語りを読んで、この文章のもつしみじみとした内容にふれさせ、一つ一つのこ
とばを深く味わって読む力、筋みちをおって正しく話す力を高めます。なお、この物
語りを読んでどんな感じがしたか、王さま・うぐいす・水くみの小娘はどんな人であ
ったかなどについて、読後感を書くことを指導し、物語りを深く味わい、広く読むこ
とに導きます

DE：①このうぐいすをどう思いますか

②うぐいすは、ごてんへどんなにしてつれて来られましたか

③このお話に出てくる人たちは、どんな人たちだと思いますか

(「うぐいす」を読んで」が載せられている)

・わたしたちの「うぐいす」を読んだ感そうを話し合いましょう

F：①王様の住んでいたごてんは、どんなようすですか

②うぐいすは、ごてんへどんなにしてつれてこられましたか

③うぐいすの声を聞いた人たちは、どんな気持ちになりましたか

・「うぐいす」を読んだ感そうを話し合いましょう

G：王さまの気もちは、どのようにかわりましたか

・森のうぐいすが来たとき

・作りもののうぐいすが来たとき

・びょうきになったとき

・森のうぐいすがかえったとき

H：①森のうぐいすを、どう思いますか。うぐいすのどこがすきですか

②お話全体で、どんなところがすきですか

③王さまの気もちは、つぎのとき、どのようにかわりましたか

・森のうぐいすが来たとき

・作りもののうぐいすが来たとき

・びょうきになったとき

・森のうぐいすがかえってきたとき

④このお話には、ところどころに、大きな字がつかってあります。なぜ、そうしてあ
るのでしょうか

⑤大きな字ではじまるそれぞれのところに、どんなことがかかれてあるか、みじか
くまとめてみましょう

I：このお話のすじにそって、それぞれのばめんのようすを思いうかべ、すきだと思うと

ころを、絵にかいてみましょう。森のうぐいすが来たとき、作りもののうぐいすがとどいたとき、病気になったときなど、いろいろなばめんの、王さまの心のうつりかわりを考えて話しあいましょう

国語教科の中で物語等を読むときに大切なことは、その内容を理解することである。これは、この童話「ナイチンゲール」を学習する意図にも含まれており、AやCにおいても明確に記されている。ただ、内容を理解するためには、ある程度、主となる場面を覚えておかなければならず、そのためにチェックリストのような形式での質問がなされている。これは確かに内容把握のためには必要なことであるが、あまり数が多いとその質問に対する答を意識してしまい、全体的な内容を把握しきれなくなってしまうのではないだろうか。しかし、そのような質問形式も年代的にみていくと、少しずつ変化している。具体的な変化をみるために、出版社別に比較してみたい。まずB～Fであるが、Bでは質問数が7つで、すべてチェックリストのような質問である。しかしCになると質問数は5つに減り、物語を読んだ感想を話し合うことを指導の1つに加えている。DEになると質問数は3つに減り、また「「うぐいす」をよんで」という話し合いを掲載し、より読書後の話し合いを意図しているように思われる。Fでは、この「「うぐいす」をよんで」は削除されているが、質問数は3つと少ないままで、ここでも読書後の感想の話し合いをすすめている。次にG～Hの教科書を比較してみる。Gでは、質問は1つだが、4つの考えるポイント場面を具体的に示している。HIになると、Gと同じ質問のほかには「どこがすきですか」という質問がなされている。このようにB～Fの質問と比べて具体的にわかりやすい指示が出されているのは、読者対象が2年生であることへの配慮ではないかと思われる。しかし、どちらの出版社の場合も、チェックリスト形式でただ1つの答を答えさせる質問だけでなく、徐々に、読者である子ども自身がこの物語についてどう感じたかという質問がなされてきている。つまり、ただ物語の主要場面を把握するだけでなく、子どもたちの心にこの物語がどのように映ったかを重視するようになっていったといえるのではないだろうか。

4. おわりに

国語教科書の中では、絵本ほどではないにしても、ページ数の関係から、その掲載可能範囲が限定されている。その限られた範囲の中では、その童話の細かな箇所まで伝えるのは不可能なことである。幸い、今回取り上げた「ナイチンゲール」は骨組みがしっかりしているので、要所要所さえ押さえていれば大筋を把握することができる。＜表6＞の中で、すべての教科書にもりこまれた内容13点をつなぎあわせれば、大体のあらすじはつかめるのであるが、そこから取りこぼされた細かな箇所にこそ、ちょっとした作者の気遣いや想いが込められているのである。たとえば、台所で働く娘がナイチンゲールのところに案内する場面で、原作では、家

臣たちはその娘に対して「台所の常雇いに取り立てる」と「お上が食事するところを拝ませる」という、安定した職と栄誉を与えている。これは「皇帝の新しい着物」の中でも見られることで、皇帝は不思議な着物を作ったいかさま師にたくさんの金銀と「御用織物匠」という称号を与えたのである。つまり、経済的な褒美だけでなく、経済的欲求が満たされた後に人間が求める名誉欲を満たす褒美も与えているのである。このことは、どの教科書にも書かれていない。しかし、これら国語教科書が、子どもたちにとって今まで自分が知らなかった新しい作品に出会う場になったことは確かであろう。内容的にみると大幅な変更箇所もあり、教科書によって抱く印象の違いは拭いきれない。最も原作に近いAの物語と、皇帝の気持ちの変化が明確に記述されている他社の物語とでは、子どもたちが読後に抱く印象が同じであるとは思われないのである。しかし、どんな形にせよ、国語教科書がアンデルセン童話と子どもたちを結ぶ役割をしたことには変わらない。ここで出会いによってアンデルセン童話に興味をもった子どもたちは、さらに原文に近い翻訳や、他のアンデルセン童話を読むようになるであろう。こうして、徐々に子どもたちが自分自身の意志でアンデルセン童話を自分の中に取り込んでいくのである。

昭和51年以降、アンデルセン童話は国語教科書という1つの子どもとの接点を失ったが、また別の形で多くの子どもたちとであっているはずである。現在の日本において子どもとのつながりの強いアンデルセン童話が、またどんな場所でどんな形で位置づけられているのか、今後も引き続き調べていきたい。また、今回の国語教科書についていえば、教師用の教科書を調べることによって、さらに深く、教科書におけるアンデルセン童話の意図を探っていきたいと思う。

〈謝辞〉

本研究を行うにあたり終始ご指導下さいました、東京家政大学新倉朗子教授に心から感謝し厚くお礼申し上げます。

〈注〉

- (1) 本来は「お話」や「物語」という意味であるが、日本においては「童話」という言葉が定着しているため、ここでは「アンデルセン童話」という言葉を用いることにする
- (2) H.C.アンデルセン 『アンデルセン自伝 ―わが生涯の物語―』
大畑末吉：訳 岩波文庫 1975 P280
- (3) 前掲書 P281
- (4) 山室静 『アンデルセンの生涯』 社会思想社（現代教養文庫） 1993 P207

- (5) この数字は調査し得た教科書の数であり、リストにあがっていながらも、原本が入手できず調査できなかったものは含まれていない。調査できなかった教科書は以下の5冊である。

<学校図書>

- ・『国語五年生 上』 財団法人学校教育研究会
使用年度：昭和26 番号：519
- ・『国語六年生 上』 財団法人学校教育研究会
使用年度：昭和26年 番号：613
- ・『国語六年生 下』 財団法人学校教育研究会
使用年度：昭和26年 番号：614

<教育出版>

- ・『改訂 小学国語 5年 上』 藤村作・北海道国語教育連盟
使用年度：昭和29年 番号：5-537
- ・『小学国語 三訂版 1年 下』 藤村作・北海道国語教育連盟
使用年度：昭和31年 番号：1-185

- (6) 表中の童話の題名は、以下の書籍から引用した

H.C.アンデルセン 『完訳アンデルセン童話』全7巻

大畑末吉：訳 岩波文庫 1984

- (7) 北川公美子 「アンデルセン童話の絵本について」

『アンデルセン研究』 第13号 1995 P55-61

このときの調査結果の上位は、次のようなものであった。

- ①「親指姫」(78冊) ②「みにくいアヒルの子」(59冊)
- ③「マッチ売りの少女」(43冊) ④「人魚姫」(35冊)
- ⑤「皇帝の新しい着物」(32冊) ⑥「野の白鳥」(19冊)
- ⑦「しっかり者の錫の兵隊」(18冊)
- ⑧「雪の女王」・「赤いくつ」(15冊)
- ⑨「ナイチンゲール」(10冊)

これ以下の作品はすべて1桁であった。

- (8)『改訂 国語 5年 上』 藤村作・北海道国語教育連盟 教育出版

1954(昭和29年) P144

- (9)『小学国語 3-1』 山本有三・石井庄司 他29名 大阪書籍

1961(昭和36年) P119

- (10) 本論における原作の日本語訳は、大畑末吉：訳 『完訳アンデルセン童話』2巻
「ナイチンゲール」 岩波文庫(1984)から引用した

- (11) 前掲書 P100
- (12) 「ナイチンゲール」が最初に日本で翻訳されたのは、1910（明治43）年の『教育お伽噺』においてであるが、その時は「天子様」という訳であった。大正時代の訳になると、「国王」や「王様」という言葉が使われ始めている。今回取り上げた教科書の「ナイチンゲール」であるが、これには翻訳者の名が明記されていない。しかし、他の童話の中で、翻訳者として大畑末吉氏と平林広人氏の名が記されているので、この童話も彼らの翻訳したものを底本としたのではないかと推測できる。『アンデルセン童話集2』（岩波文庫 1939）の中で、大畑氏は「皇帝」と訳し、平林氏も『少年少女世界名作文学全集19 アンデルセン童話』（小学館 1961）の中で「皇帝」と訳している。もし、これらを底本としたならば、教科書の編者たちは、意図的に「王さま」と書き換えたということになる
- (13) 東京家政大学1994年度入学の女子大生の「ナイチンゲール」に触れたレポートを見ても、「ナイチンゲールと言えば看護婦としか連想しなかったが、日本がでてくるこの童話に親近感をもった」と述べている例が複数認められた

〈参考文献〉

- 1)『教科書検定総覧 小学校篇』
永芳弘武・中村紀久二・加藤宗晴：共編 小宮山書店 1968
- 2)『教科書検定総覧・続 小学校篇』（仮製本）
- 3)『日本教科書体系 近代編 第9巻 国語（六）』
海後宗臣：編 講談社 1964
- 4)『東書文庫所蔵 教科用図書目録 第3集』
東京書籍株式会社附設教科書図書館「東書文庫」：編 東京書籍 1982
- 5)『教育お伽噺』 和田垣謙三・星野久成 小川尚栄堂 1910
- 6)『アンデルセン童話集』 森川憲之助 真珠書房 1922
- 7)『アンダアセン名著選』 模範童話選集10 童話研究会：編
博文館 1925
- 9)『アンデルセン童話集 2』 岩波文庫 大畑末吉：訳 1939
- 10)『アンデルセン童話』 少年少女世界名作文学全集19 小学館
平林広人：訳 1963
- 11) H.C.Andersen: Samlede Eventyr og Historier
HANS REITZELS FORLAG 1994
- 12)『教科書と児童文学』 向川幹雄 高文堂出版社 1995

【資料１】 小学校国語教科書に掲載されたアンデルセン童話 (昭和22～63年)

<親指姫>

- 1) 「おやゆびひめ」 【小学新国語 2年 上】 光村図書 石森延男・遠藤嘉基・小林英夫 他6名 番号：2-295
 2) 「おやゆびひめ」 【小学新国語 2年 上】 光村図書 石森延男・遠藤嘉基・小林英夫 他6名 番号：2011

<皇帝の新しい着物>

- 3) 「はだかの王さま」 【国語 3年の2】 日本書籍 山本有三 番号：349 (紙芝居)
 4) 「王様の着物」 【四年生の国語 上】 学校図書 志賀直哉・久松潜一 他9名 番号：446
 5) 「はだかの王様」 【小学校国語 4年 下】 学校図書 志賀直哉・久松潜一 他 番号：4-456
 6) 「はだかの王様」 【新編 国語の本 4年 下】 二葉 西原慶一・泉節二・山下正雄 他 番号：A-403
 7) 「はだかの王様」 【小学校国語 4年 下】 学校図書 志賀直哉・久松潜一 他 番号：A-406
 8) 「はだかの王さま」 【小学国語 三訂版 3年 上】 教育出版 藤村作・北海道国語教育連盟 番号：3-358
 9) 「はだかの王様」 【国語 4年 上】 日本書院 奥水実 番号：A-414
 10) 「はだかの王様」 【小学校国語 3年 下】 学校図書 志賀直哉・久松潜一・吉田精一 他35名 番号：3006
 11) 「はだかの王様」 【国語 4年 上】 二葉 武者小路実篤・奥水実 他 番号：4003
 12) 「はだかの王様」 【国語 4年 上】 教育出版 武者小路実篤・奥水実 他 番号：4003
 13) 「はだかの王様」 【小学国語 4-1】 日本書籍 山本有三・石井庄司 他29名 番号：4029 (放送劇)
 14) 「はだかの王様」 【小学校国語 3年 下】 学校図書 志賀直哉・久松潜一・吉田精一 他34名 番号：3026
 15) 「はだかの王様」 【新版 標準国語 4年 下】 教育出版 坪田譲治・亀井勝一郎・池田弥三郎 他26名 番号：4024
 16) 「はだかの王様」 【小学新国語 4年 上】 光村図書 石森延男・遠藤嘉基・小林英夫 他7名 番号：4035
 17) 「はだかの王様」 【小学国語 4-1】 日本書籍 山本有三・石井庄司 他29名 番号：4045 (放送劇)
 18) 「はだかの王様」 【新訂 標準国語 4年 下】 教育出版 坪田譲治・亀井勝一郎・池田弥三郎 他23名 番号：4042
 19) 「はだかの王様」 【小学新国語 4年 上】 光村図書 石森延男・遠藤嘉基・小林英夫 他6名 番号：4043
 20) 「はだかの王様」 【新しい国語 4年 上】 東京書籍 大石初太郎・阪倉篤義・林四郎 他21名 番号：4031
 21) 「王さまの新しい服」 【小学校国語 4年 上】 学校図書 井上敏夫・野地潤家・望月久貴 他24名 番号：4021
 22) 「はだかの王様」 【新版 標準国語 4年 下】 教育出版 西尾実 他19名 番号：4042
 23) 「はだかの王様」 【新訂 新しい国語 4年 上】 東京書籍 大石初太郎・阪倉篤義・林四郎 他23名 番号：4061
 24) 「王さまの新しい服」 【小学校国語 4年 上】 学校図書 49井上敏夫・野地潤家・望月久貴 他17名 番号：4071
 25) 「はだかの王様」 【改訂 標準国語 4年 下】 教育出版 西尾実 他20名 番号：4082

<野の白鳥>

- 26) 「白鳥ものがたり」 【よいこの国語 2年 下】 大阪書籍 新国語研究会 番号：292
 27) 「白鳥ものがたり」 【よいこの国語 2年 下】 広島図書 新国語教育研究会 番号：292

<ナイチンゲール>

- 28) 「夜うぐいす」 【太郎花子国語の本 改訂版 4年 上】 日本書籍 井上超 他11名 番号：4-433
 29) 「うぐいす」 【国語 3年 下】 信濃教育会 松岡弘 番号：3-337
 30) 「うぐいす」 【国語 3年 下】 信濃教育会 西尾実 番号：3-385
 31) 「うぐいす」 【国語 3年 下】 信濃教育会 西尾実 番号：3022
 32) 「森のうぐいす」 【小学校国語 2年 下】 学校図書 志賀直哉・久松潜一・吉田精一 他34名 番号：2026

- 33) 「うぐいす」 【国語 3年 下】 信濃教育会 西尾実 番号：3038
- 34) 「森のうぐいす」 【小学校国語 2年 下】 学校図書 志賀直哉・久松潜一・吉田精一 他27名 番号：2040
- 35) 「うぐいす」 【国語 3年 下】 信濃教育会 西尾実 番号：3050
- 36) 「森のうぐいす」 【小学校国語 2年 下】 学校図書 井上敏夫・野地潤家・望月久貴 他24名 番号：2022

<みにくいアヒルの子>

- 37) 「みにくいあひるの子」 【国語 第4学年 中】 東京書籍 文部省 番号：401
- 38) 「白鳥物語」 【国語 4年生 下】 学校図書 学校教育研究会 番号：408
- 39) 「白鳥物語」 【国語 4年生 下】 学校図書 斉藤清衛・岡本明 他4名 番号：449
- 40) 「みにくいあひるの子」 【小学国語 4年 下】 大阪書籍 大阪書籍国語編集委員会 番号：446 (劇)
- 41) 「みにくいあひるの子」 【小学国語 4年 下】 大阪書籍 重松鷹泰・今井鑑三 他2名 番号：4-425 (劇)
- 42) 「みにくいあひるの子」 【よい子の国語 4年 下】 大阪書籍新国語教育研究会 番号：4-416 (劇)
- 43) 「みにくいあひるの子」 【よいこの国語 4年 下】 広島図書新国語教育研究会・長田新 番号：4-416 (劇)

<マッチ売りの少女>

- 44) 「マッチ売りのむすめ」 【国語 第6学年 中】 東京書籍文部省 番号：601
- 45) 「マッチ売りの少女」 【国語 4年 下】 信濃教育会 西尾実 番号：4-488

<さやからとび出た五つのエンドウ豆>

- 46) 「五つぶのえんどうまめ」 【国語 4年生 上】 学校図書 斉藤清衛・岡本明 他4名 番号：448
- 47) 「五つぶのえんどう」 【国語 5年 上】 教育出版 藤村作 番号：558
- 48) 「五つのえんどう豆の話」 【改訂 新しい国語 4年 下】 東京書籍 柳田国男 番号：4-404
- 49) 「五つぶのえんどう」 【国語 四年生 下】 学校図書 斉藤清衛・岡本明 他 番号：4-409
- 50) 「五つぶのえんどう」 【小学国語 5年 上】 教育出版 藤村作・北海道国語教育連盟 番号：598
- 51) 「五つぶのえんどう」 【小学国語 5年 上】 教育出版 藤村作・北海道国語教育連盟 番号：5-535
- 52) 「えんどうまめと少女」 【小学国語 3年 上】 大阪書籍 川端康成・浜田広介 番号：3019
- 53) 「エンドウと少女」 【小学国語 3-1】 日本書籍 山本有三・石井庄司 他29名 番号：3029
- 54) 「エンドウと少女」 【小学国語 3-1】 日本書籍 山本有三・石井庄司 他29名 番号：3045

<茶びん>

- 55) 「ポットの話」 【新編 新しい国語 5年 下】 東京書籍 時枝誠記・成瀬正勝 他19名 番号：5028

<ろうそく>

- 56) 「二つのろうそく」 【小学新国語 6年 下】 光村図書 石森延男・遠藤嘉基・小林英夫 他6名 番号：A-633